

激動！ 膀胱癌薬物治療

企画にあたって

泌尿器科領域の中でも膀胱癌は最も「遅咲き」の疾患と言ったら語弊があるだろうか。否，その薬物療法は1990年代から30年近く予後改善をもたらす新規薬剤が登場しなかった。その状況を打破したのが，2017年のペムブロリズマブ二次治療だったわけだが，それを皮切りに瞬く間に多くの新規治療レジメンが開発され臨床で使用可能になった。

縁は異なるものの味なもの，膀胱癌治療薬の開発が停滞していたまさに1990年代から2010年代にかけて活躍した，遅咲きのオランダ人ストライカーの言葉が現在の状況を見事に言い表している。曰く，「ゴールって言うのはケチャップみたいなもの。いくら頑張っても出ないと思ったら，一気にたくさん出たりする」。日本でも代表選手がインタビューで引用したことで広まった。

ルート・ファン・ニステルローイの「ケチャップドバドバ」の喩え通り，膀胱癌薬物治療は今まさに激動の時代に入ったと言えるだろう。しかし，いくつものスパイスが用意されていても，それをうまく使いこなすことができなければ，料理は苦くなったり渋くなったりするものだ。いかにしてその良さを引き出すことができるか。それこそがわれわれの腕の見せどころだと思っている。

大きな転換点を迎えた膀胱癌薬物治療において，その有効性と安全性を最適化するために必要不可欠な知識として，歴史的経緯，分子病理学的背景，個々の新規治療がもたらしたインパクト，国際共同治験を解釈するうえでの注意点，さらには今後の展望についてエキスパートに解説いただいた。スパイスの選択肢が増えたのは結構なことだが，それでもほとんどの人が最後のデザートを笑って食べることができないという現状に変わりはない。本特集がそんな膀胱癌薬物療法の最前線において求められ続けてきた希望に満ちた光を垣間見させてくれるものになれば幸甚である。

京都大学大学院医学研究科
泌尿器科学

小林 恭